

聞き取り能力の向上に向けて：語彙指導を用いて

Improving the listening comprehension with vocabulary instruction.

浦（安村）由希子

（こども学科 講師）

要旨 本研究では学童期の読解の問題を予防するため、読解と処理過程が似ており、相関も強い聞き取り能力を向上させることを目的に、聞き取りと語彙指導を組み合わせた指導法を考案し、その効果を検証した。対象児は言語理解と表出の両方の検査で遅れの見られた年長児6名である。指導回数は週1回、1ヶ月間、2～3名のグループでの指導を行った。指導はお話を読み聞かせ、その中に出てくる語彙を内容と関連付けながら、指導した。

その結果、6名中5名の対象児において、聞き取りと語彙の両方で、伸びが見られた。しかし、伸びの度合いは指導回数また言語の問題の重症度によって左右されることが示された。

今後の課題としては、指導回数を増やすこと、また幼児期の聞き取りや語彙の伸びが、学童期の読解の能力とどのように関連するのか追跡調査をすることが必要と考えられる。

【キーワード：読解 聞き取り 語彙 指導】

【Keywords : reading comprehension, listening comprehension, vocabulary, instruction】

I. はじめに

学習障害（LD：Learning Disabilities, 以下LD）とは知的な能力の遅れや感覚器系、環境的な問題などがないにもかかわらず、学習に遅れをもつ者を指す¹⁾。その原因として、読む・書く・話す・聞くといった学習の基礎となる言語スキルに問題があり、その中でも読み、特に読んだ内容の理解（読解）に問題をもつ者が多い。筆者らが以前対象としたLD児の中にも、約8割に読解の問題が見られるなど²⁾、読解の問題はLDの問題の中核とも言える。ところが、英語圏でもLD児の読解の躓きに対する指導法の研究は少ないと言われ³⁾、日本ではLDというより、知能が全般的に低い子どもを対象とした指導法の研究が多い^{4) 5)}。LD児の読解の問題は言語発達の問題に起因するため⁶⁾、知的能力の低さからくる読解の問題とは質が異なる。よって、LDの特性に合わせた指導法が必要と言える。

では、LD児の読解の問題にはどのような特徴があるのだろうか。先行研究より、以下の点が分かっている^{6) 7) 8) 9)}。

- ・書かれた内容の理解や、書かれた内容に基づく推測が難しい。
- ・教科書の物語より説明文の理解が悪い。
- ・語彙や文法、比喩の理解や表出など幅広い言語の領域に問題を示す。
- ・特に意味の判断が求められる課題（例：ヨッ

トとボートは似ているか？）や意味的に関連する言葉を表出する課題（例：「動物」と言えば？）に問題が出やすい。

こうした言語面における問題は、文字習得の始まる前の幼児期の段階から認められると言う。Nationらによると、8歳の段階でLDと判断された児童の5歳時の段階を調査したところ、言語の理解面と表出面の両方に問題が見られ、8歳の段階とプロフィールが同じであったという¹⁰⁾。また、田中の追跡調査でも、5歳の段階で言語の表出課題に躓きのあった幼児は小学校2年生の段階で読解の躓きが見られたと言う¹¹⁾。こうしたことから、Nationらは幼児期における言語発達の能力が学童期における読解能力を予測するとしている¹⁰⁾。言い換えると、読解の問題というのは幼児期から存在する言語発達の問題が現れた結果であり¹⁰⁾、幼児期の言語発達をどう支援するかが学童期の読解の問題を左右するポイントの一つと考えられる。

そこで、本研究では読解の問題を予防する前段階の取り組みとして、幼児期における言語指導プログラムを作成し、その効果を検証することとする。中でも本研究では、様々な言語領域のうち、聞き取りの側面を向上させるプログラムを作成する。というのも、“文字を読んで理解する読解”と“お話を聞いて理解する聞き取り”は処理過程が似ており、相関も非常に強い($r=0.9$)⁹⁾。しかし、単に絵

本の読み聞かせをするだけではLD児の聞き取り能力は伸びず、話の内容の理解につながるような働きかけ、つまり一つ一つの言葉の意味を理解させる語彙指導が必要と考えられる。

そこで、本研究では幼児の聞き取り能力を高めるために、聞き取りと語彙指導を組み合わせた指導法を考案し、その効果を検証することとする。

II. 方法

1. 対象児

A市B保育園の年長児47名に対し、研究内容と同意文書を配布し、同意の得られた42名の年長児（5歳7か月～6歳6か月、平均：6歳0ヶ月、男児27名、女児15名）に対し、以下の課題を実施した。

2. スクリーニング課題

言語理解を測定するためPVT（絵画語彙発達検査）を、言語表出を測定するためITPAから言葉の類推を実施した。

●PVT・・・語彙が口頭で呈示されるので、子どもは該当する絵を4つの中から選択しなければならない。具体的な手続きはマニュアルにそって行った。実施後、正答数を評価点に換算した。

評価点の平均は10、標準偏差は3である。

●ITPA(言葉の類推)・・・文章が口頭で呈示されるので、子どもはその続きに合う語彙を推論して表出しなければならない。具体的な手続きはマニュアルにそって行った。実施後、正答数を評価点に換算した。評価点の平均は36、標準偏差は6である。

例：「お父さんは大きい、子どもは？」※正答は「小さい」

先行研究より¹²⁾、両検査でマイナス1.25SD以下を言語の問題があると仮定した(PVTではSS6以下、言葉の類推ではSS28以下となる)。その結果、6名が該当した。なお、今回の基準は満たさなかったものの、担当保育者より「指示と違うことをしている」「落ち着きがない」などの報告のあった1名も対象とし、計7名の保護者に対し、スクリーニング結果の報告と更なる調査の説明を行った。その結果、同意の得られた6名の幼児に対し、WPPSI知能検査を実施することとした。以下、6名のスクリーニングや知能検査の結果（表1）とテスト中の様子を示した。

表1 対象児のプロフィール

氏名	性別	生活年齢	WPPSI(知能検査)			言語検査	
			言語性	動作性	総合	理解面(言語年齢) ^{*1}	表出面(言語年齢) ^{*2}
A	男	5歳 7ヶ月	67	95	77	6 (4歳 0ヶ月)	30 (4歳3ヶ月)
B	男	6歳 2ヶ月	63	89	70	4 (3歳 7ヶ月)	20 (3歳3ヶ月)
C	男	6歳 2ヶ月	89	104	95	5 (4歳 0ヶ月)	20 (3歳3ヶ月)
D	女	5歳10ヶ月	64	101	78	5 (3歳10ヶ月)	25 (3歳9ヶ月)
E	男	6歳 3ヶ月	79	94	83	6 (4歳 8ヶ月)	28 (4歳7ヶ月)
F	男	5歳 7ヶ月	58	97	77	6 (3歳 2ヶ月)	22 (3歳2ヶ月)

理解面(言語年齢)^{*1}：PVT絵画語彙発達検査による結果。評価点と言語年齢を示した。評価点の平均は10である。

表出面(言語年齢)^{*2}：ITPA言葉の類推による結果。評価点と言語年齢を示した。評価点の平均は36である。

○A児：自分のことを○○君（A児自身の名前）と呼んだり、言葉の類推のテストで「りんごは赤い、バナナは？」という問いに、“イエロー”と答えるなど、視点の切り替えの弱さや場面に応じた言語の遣い方に問題があると考えられた。また、自分の興味のあるものは突っ走って話をするが、

こちらから質問をしても返答が返ってこなかったり、「忘れた」という回答が多くあった。本来スクリーニング検査では対象とならない幼児であったが、担当保護者により精査の対象となった。

○B児：こちらから「家族は何人か？」と問うと、

友達の名前を挙げて6人と答えるなど、質問に対する的確な答えが導き出せなかった。また、多く話すわりに、何を言いたいのかこちらが理解できないことが多かった。

- C児：言葉の類推のテストでは「ねぎは長い、すいかは？」の問いに、「長くない」と答えるなど、適切な語彙を表出できず、元の文に否定形で表す様子が多かった。また分からない際には、「分からない」とは言わず、黙り込む様子が見られた。
- D児：言いたいことはあり伝えたい気持ちもあるようだが、それが言葉として出にくい様子で「あの一、えっと」という様子がよく見られた。また、検査場面で突然歌い出すなど、状況理解にも問題が見られた。
- E児：特に複雑な文の理解が難しいようであった。また、言語面以外でも、場の状況の把握、さっとした行動は少し難しいようであった。しかしながら、本児にとって難しい問題に対しても、何らかの答えを言おうとしたり、「まだ今は分からない」と答えるなど、負けず嫌いの側面も持ち合わせ、また分かるようになりたいという思いはあるようであった。
- F児：担当保育士によると、日常生活において、質問したことに對し、文脈にそぐわない答えが返ってくる人が多いとのことであった。また、ITPA言葉の類推では、「りんごは赤い、バナナは？」の問いに、“つめたい”と答えるなど、つながりのある回答を出せなかった。またWPPSIの「理解」のテストでは実施したすべての問いに對し、適切な答えが出せず、粗点は0点であっ

た。また、担当保育士によると、落ち着きがなく、離席行動もあるとのことであった。なお、F児は構音の問題も抱えており、半年に1回STによる言語指導を受けている。

以上、全員知的な遅れはないにもかかわらず（動作性IQは85以上）、スクリーニング検査の結果やWPPSIのVIQに問題が見られた。また、C児以外は言語面と動作性のIQに大きな乖離が見られた。また、C児以外、言語面だけでなく落ち着きのなさや他者とのコミュニケーションにも問題を抱えていた。

この6名に對し、保育園にて週1回言葉の指導を行うこととした。

3. 指導プログラムの作成

- 1) 指導語彙の選択：国立国語研究所が定める日本語の動詞の系をつくりあげるための基本となる単語から動詞215語、形容詞14語を選択した¹³⁾。また、実際の幼児の言語発達を記録した大久保の研究より、4歳～6歳段階で表出された言葉のうち、話し言葉及び書き言葉の双方で役立つと考えられた名詞38語を選択した¹⁴⁾。
- 2) お話の作成：本学1年生120名に、「日本語表現」の授業（担当：石川先生、細田先生）で、2500文字程度のお話を作成してもらった。その際、1の単語から、3～5つの単語を含むようにして、年長児用のお話を考えてもらった。その後、書いてもらったお話を段落ごとに分け、各段落の内容に合う絵を作成した（図1）。

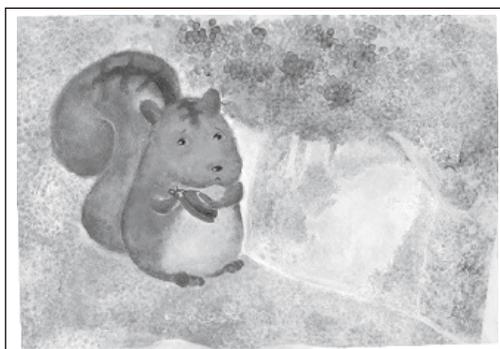


図1：指導教材の一例

吹き出しはお話の内容である。
対象児には絵のみを見せて、吹き出し部分は指導者が口頭で呈示した。
なお、この場面での指導語彙は“叩く”である。

あるところに、楽器を演奏することが
だいすきな、りすの男の子がいまし
た。彼の名前はユーリス。ユーリスは
一人ぼっちです。一人ぼっちでさみし
いゆーりすは、いつも、朝起きてから
自分の家の一番高いところに登っ
て、どんぐりのからで出来た手作りの
カステネットを叩きながら歌うことが
習慣です。ユーリスの村のりす達
は、みんなユーリスの奏でる演奏を
聞いて目を覚まします。

4. 指導

指導の概要は以下の通りである。

1) お話の読み聞かせ

2) 内容に関する質問

「誰が出てきたか?」「最後はどうなったか?」など、お話の概要に関する質問を行った。

3) 語彙の指導

お話に出に出てきた語彙を取り上げ、意味と使い方を指導した。

例えば、「叩く」について指導する際は、まず、お話の中で登場人物はどのようにして音を出していたか質問し、カスタネットを“叩いて”音を鳴らしていたことに気づかせた。次に、指導者が手を“叩いて”いるところを見させ、何をやっているところか対象児に尋ね、別の使い方を知らせた。最後に、「肩を叩いて下さい」と対象児に“叩く”を使った例題をいくつか出し、動作で表現させた。分かっていないようなら、モデルを示し、まねさせた。このようにして、1回の指導で3つから5つの語彙を取り扱うこととした。

4) 再度、お話の読み聞かせ

5) 内容に関する質問

2)とは異なり、例えば「登場人物が持っていた楽器は何で出来ていたか?」など、お話の内容に関する細かな質問を行った。

6) 内容に関する語り

(1)や(4)で使用した絵をバラバラに提示し、対象児にお話の流れにそって並べ替えさせた。その後、並び替えた絵を基にして、それぞれの場面を語らせた。

5. 指導者、指導場所、指導回数

指導者は筆者であり、対象児を2～3名に分け、スモールグループで行った。場所は園の学童保育の場所及び子育て支援センターの一室を借りて行った。指導回数は週に1回であり、1回の指導時間は約30分、1ヶ月間(計4回)行った。計4回の指導で、3つのお話を使い、15個の語彙を指導した。なお、4回の指導のうち、病欠等の理由で、A児、B児、D児は3回、F児は2回のみ指導であった。

6. プレ&ポストテスト

聞き取り課題と語彙課題を、指導前と指導後に行った。

○聞き取り：2つのお話を聞き、内容に関する質問に答えさせた(計12問)。2つのお話はどちらも指導に使用したお話である。一つは絵があり、もう一つは絵がなく音声のみの表示である。これらをパワーポイントを使い呈示した。

○語彙：20問の動作語が絵カードになっているので、何をしているところか答えさせた。語彙は指導しているもの、指導していないものの両方が含まれている。

Ⅲ. 結果

聞き取り課題においては、A児は指導前12問中1問(8.3%)の正答だったのが、8問(66.7%)、B児は1問(8.3%)から7問(58.3%)、C児は2問(16.7%)から7問(58.3%)、D児は5問(41.7%)から8問(66.7%)、E児は3問(25%)から9問(75%)、F児は1問(8.3%)から4問(33.3%)に正答数が向上した。全体の正答率の平均は事前が18.1%(標準誤差5.0)、事後が59.7%であった(標準誤差5.4)。表2に対象児個々の結果を、図2に全体の結果を示した。

語彙課題において、A児は指導前20問中6問(30%)の正答だったのが、10問に向上した(50%)。B児は9問(45%)の正答から12問(60%)、C児は12問(60%)から14問(70%)、D児は10問(50%)から13問(65%)、E児は11問(55%)から14問(70%)と向上した。一方、F児は指導前後で変わらず、12問(60%)の正答だった。全体の正答率の平均は事前が50%(標準誤差4.7)、事後が62.5%であった(標準誤差3.1)。表3に対象児個々の結果を、図3に全体の結果を示した。

表2 聞き取り課題の結果(個人)

対象児	事前	事後	伸び率(%)
A	1(8.3%)	8(66.7%)	58.4
B	1(8.3%)	7(58.3%)	50
C	2(16.7%)	7(58.3%)	41.6
D	5(41.7%)	8(66.7%)	25
E	3(25%)	9(75%)	50
F	1(8.3%)	4(33.3%)	25

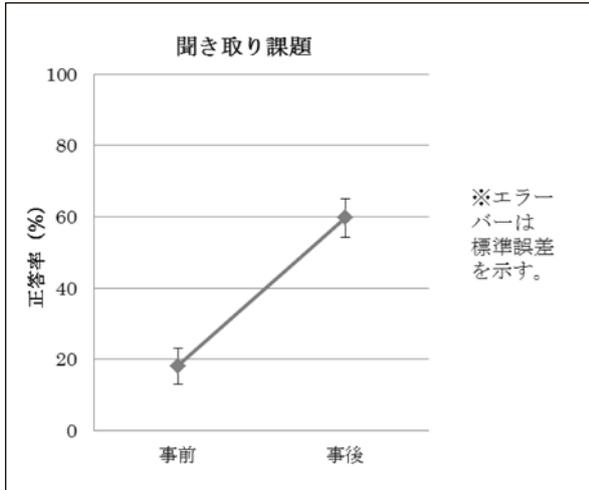


図2 聞き取り課題の結果 (全体)

表3 語彙課題の結果 (個人)

対象児	事前	事後	伸び率(%)
A	6(30%)	10(50%)	20
B	9(45%)	12(60%)	15
C	12(60%)	14(70%)	10
D	10(50%)	13(65%)	15
E	11(55%)	14(70%)	15
F	12(60%)	12(60%)	0

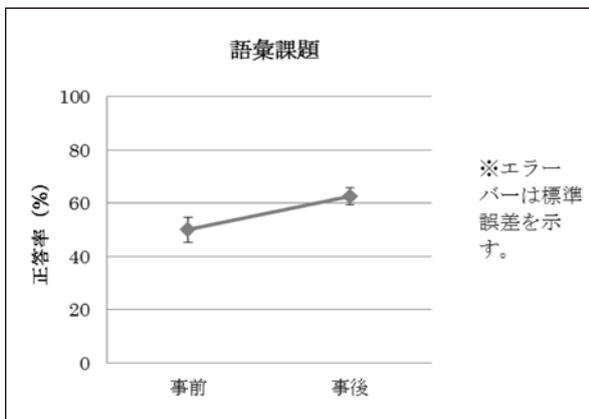


図3 語彙課題の結果 (全体)

IV. 考察

聞き取り課題では全員に伸びが見られたことから、本研究で用いた教材や語彙を使った指導方法が聞き取りの向上に有効であったことが伺われた。対象児ごとに伸びの違いを見ていくと、6名中F児が最も伸びが低かった。この理由として、WISC-Ⅲの言語性が一番悪いことから、言語の問題が重篤であり、かつ指導も4回中2回しか取れなかったことが原因と考えられる。なお、C児はWPPSI

のVIQでは平均内であったり、また行動面に問題は見られなかったりなど、ほかの対象児と幾分特性が異なっていたが、伸び率や達成度に大きな違いは見られなかった。

なお、語彙課題及び聞き取り課題において、最も正答率が高い対象児でも7割程度の達成率であった。今後は更に聞き取りの力を高めるために、指導中における聞き取りの回数を増やしたり、絵をできるだけ少なくして聞くことにもっと焦点が当たるといったような指導教材が必要と考えられる。また、今回はプレ実験として1ヶ月4回の指導しか取らなかったが、今後指導効果を向上させるためにも頻度を増やすことが必要と考えられる。また、言語の問題の重症度に応じた指導効果の違いを検証したり、読解の問題への効果についても追跡調査を行い検討することが必要と考えられる。

V. 結論

言語の理解と表出の双方に遅れの見られた幼児6名を対象に、聞き取り能力を向上させることを目的に、語彙指導を行ったところ、6名中5名の対象児において、語彙と聞き取りの両方で伸びが見られた。

謝辞：本研究を遂行するに当たり、調査及び指導にご協力下さった対象児および保護者の皆様に御礼を申し上げます。また、本研究にご協力頂いたすかげ保育園、春山幼稚園及び羽生市教育委員会に厚く御礼申し上げます。最後に、本指導の要でもあるお話を作成してくれた本学学生及び熱心にご指導下さいました石川先生、細田先生にこの場を借りて御礼申し上げます。

尚、本研究はJSPS科研費24730772の助成を受けたものです。

【文献】

- 1) 文部科学省.学習障害児に対する指導について(報告).学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議 主査 山口薫.1999
- 2) 浦由希子,遠藤重典,田中裕美子.読み書き障害児におけるかなの習得の躓きに対するトップ

- ダウン式指導法の効果について. コミュニケーション障害学. 2010, 27(2), p.87-94 ,1978
- 3) Claudine, B C. et al. Improving early language and literacy skills: differential effects of an oral language versus a phonology with reading intervention. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*. 2008, 49, p.422-432
 - 4) 天野清. 小学校低学年LD児に対する読み・書き入門言語・認知教育プログラム. LD（学習障害）研究 .2006, 15(3), p.354-368
 - 5) 犬塚美輪. 文章理解の困難を主訴とする高校生への読解方略指導--読解プロセスの観点から. LD(学習障害)研究 .2006, 15(3), p.330-338
 - 6) Catts, H W.; Adlof, S M.; Weismer, S E. Language deficits in poor comprehenders: A case for the simple view of reading. *Journal of Speech, Language and Hearing Research*. 2006, 49, p.278-293
 - 7) Cragg, L.; Nation, K. Exploring written narrative in children with poor reading comprehension. *Education Psychology*. 2006, 26, p.55-72
 - 8) 田中裕美子, 入山恵満子, 小林健史. 言語学習障害児早期発見のための縦断研究 1. 日本LD学会大会発表論文集. 2009, 18, p.267
 - 9) Nation, K. "Children's reading comprehension difficulties". *The science of reading*. Snowling, M J., Hulme, C. Oxford Blackwell Publishing, 2005, p.248-265
 - 10) Nation, K. et al. A longitudinal investigation of early reading and language skills in children with poor reading comprehension. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*. 2010, 51(9) , p.1031-1039
 - 11) 田中裕美子ほか. 話しことばと書きことばの関係に関する研究 I: 聴覚的理解と読解. 日本コミュニケーション障害学会予稿集. 2011, 37, p.68
 - 12) Tomblin, J.B; Records, N.; Zhang, X.; A system for the diagnosis of specific language impairment in children. *Journal of Speech and Hearing Research*. 1996, 39, p.1284-1294
 - 13) 国立国語研究所. "第2節調査経過の概要". 幼児の語彙能力. 東京書籍株式会社, 1980, p.17-19
 - 14) 大久保愛. 幼児語彙の発達. 渡辺製本株式会社